日和見主義とは

1914 ～ 1915 年の戦争の情勢のもとでは、日和見主義はほかならぬ社会排外主義を生みだすのである。日和見主義の主要な点は、階級協力の思想である。戦争は、この思想を最後までおしすすめ、しかも、この思想の通常の要因や動機に多くの異常な要因や動機をつけくわえ、ばらばらになっている住民大衆を、特別の威嚇や暴力によってむりやりにブルジョアジーに協力させる。この事情は、当然に、日和見主義の支持者の範囲をふやしており、きのうまでの急進主義者の多くのものがこの陣営に投じてくる理由を完全に説明している。

日和見主義とは、大衆の根本的な利益を労働者のうちのとるにたりない少数者の一時的な利益の犠牲にすることであり、言いかえれば、プロレタリアートの大衆を敵として一部の労働者とブルジョアジーとが同盟することである。戦争は、このような同盟を、とくに判然とした、また強制的なものにする。日和見主義は、特権的な労働者層の比較的に平和で文化的な生存が彼らを「ブルジョア化」し、彼らに自国の資本の利潤のおこぼれをあたえ、零落させられ貧窮している大衆の災厄や苦難や革命的気分から彼らを分離させた、資本主義発展の一時代の特殊性によって、数十年のあいだに生みだされたものである。……小市民の「上層」または労働者階級の貴族（および官僚）としての自分の特権的地位を擁護し強化すること、――これが、小ブルジョア的＝日和見主義的希望とそれにふさわしい戦術との、戦時における自然の継続であり、これが、こんにちの社会帝国主義の経済的基礎なのである。そして、いうまでもないことながら、習慣の力、比較的に「平和」な進化のしきたり、民族的な偏見、急転換にたいする恐怖と不信、――すべてこういうことが、日和見主義をも、また日和見主義との偽善的で臆病な和解――一時的なものにすぎないと言われ、もっぱら特別の原因や動機によるものと言われている――をもつよめる追加の事情としての役割をはたした。　　注）……は青山の略

第 21 巻 P242~243『第ニインタナショナルの崩壊』

1915 年 5 月後半～ 6 月前半に執筆

コメント

日和見主義の主要な点は、階級協力の思想である。日和見主義とは、大衆の根本的な利益を労働者のうちのとるにたりない少数者の一時的な利益の犠牲にすることであり、言いかえれば、プロレタリアートの大衆を敵として一部の労働者とブルジョアジーとが同盟することである。日和見主義は、特権的な労働者層の比較的に平和で文化的な生存が彼らを「ブルジョア化」し、彼らに自国の資本の利潤のおこぼれをあたえ、零落させられ貧窮している大衆の災厄や苦難や革命的気分から彼らを分離させた、資本主義発展の一時代の特殊性によって、数十年のあいだに生みだされたものである。

習慣の力、比較的に「平和」な進化のしきたり、民族的な偏見、急転換にたいする恐怖と不信、すべてこういうことが、日和見主義をも、また日和見主義との偽善的で臆病な和解をもつよめる追加の事情としての役割をはたしている。

そして、日和見主義思想は、不断に、私達の隊列に入り込み、思想闘争を怠ると、幹部の多数をも占めることがあることは歴史が示している。